

第16回群馬県地域リハビリテーション協議会報告

群馬県地域リハビリテーション協議会・委員長 山口晴保

第16回群馬県地域リハ協議会が3月19日に県庁で開催され、地域包括ケアシステムの中での地域リハを中心にして議論がなされた。

まず、平成26年度の活動実績が報告された。県支援センターは介護予防サポーターの「学び直し」教材を作成したことなどが報告された。12広域支援センターの実績報告では、研修会は11センターで計32回開催、介護予防サポーター養成研修は11センターで32回、実地指導は12センターで190回、電話相談は7センターで55回、面接は6センターで28回など、県全体での実績として報告された。

平成27年度の予算については、26年度と同額を確保したことが報告された。

介護予防サポーターの育成は、今年度も初級645名、中級564名、上級263名が誕生し、9年間の総計は、初級が8,314名、中級5,908名、上級2,582名となった。

続いて「厚労省の介護予防と地域リハについての考え方」として、これまでは機能訓練に偏りすぎていたので、これからは「活動」や「参加」に焦点を当てる方向であることが示された。さらに、リハ職等を活かした介護予防の機能強化、住民運営の通いの場（歩ける範囲で集える場）へのリハ職の助言などが期待されているという。

次いで、「群馬県の地域リハ推進の計画」として、「リハ職と市町村職員の意見交換会」と「介護予防の推進に資するOT・PT・ST指導者育成事業」を新規事業として実施する予定であると報告された。さらに、「市町村および広域支援センターへのアンケート調査結果」の報告があり、これらを元に、意見交換が行われた。

市町村が今後実施する「地域リハ活動支援事業」では、通所、訪問、地域ケア会議、サービス担当者会議、住民運営の通いの場などへのリハ専門職の関与を促進することを示している。住民運営の集いの場に対してリハ職の支援を行う「地域づくりによる介護予防推進支援モデル事業」に邑楽町が今年度取り組んでいる。

群馬県ではOT・PT・STの3士会が協調して働けるよう、人材育成と人材データベース作りを進めていると説明があった。理学療法士会では、4日間のリーダー研修を会員の約25%、約400名が受講し、「地域ケア会議や介護予防事業の」ニーズに応えられるよう人材育成を進めている。さらに、山路会長が県下全市町村を回り、派遣先を募っている。また、市町村や地域包括支援センターからの依頼を受ける窓口を3士会で一本化する。さらに3士会合同の研修会も予定している。

リハ関連職3士会が積極的に地域包括ケアへの対応を進めていることが、心強かった。

群馬県地域リハビリテーション広域支援センター連絡協議会

群馬県地域リハビリテーション支援センター長 山崎恒夫

平成26年度群馬県地域リハビリテーション広域支援センター連絡協議会が平成27年3月19日（木）、群馬県庁29階の294会議室で開催されました。

会は第16回群馬県地域リハビリテーション協議会に引き続き行われ、最初に本年度の県地域リハ支援センターの主な活動報告がなされました。まず平成27年2月22日にイオンホール高崎で第4回介護サポーター交流大会を開催し、参加12団体、約200名の参加者を得て、大変盛大であったこと。また、当日には新しい試みとして上級介護サポーターの方々を対象とした「学び直し」講習を行い、多くの熱心なサポーターにお集まりいただいたこと。平成27年1月24日には“第13回群馬地域リハ研究会”を、同年3月5日には“華麗に加齢のサイエンス2015”を開催し、いずれも例年を上回る人数のご参加がいただけたことが報告されました。

続いて、自由な意見交換を行いました。この場では、行政が展開する新しい介護予防事業における、広域支援センターの今後の位置づけなどについて、大変活発な意見交換をすることができました。今回の討論をとおして、皆様の地域リハ活動にかける情熱を十分感じ取ることができたと思います。

第 13 回地域リハ研究会

医療法人 中央群馬脳神経外科病院 ソーシャルワーカー 村井雅子 * * * * *

「自分の物差しをポキッと折られたような…」そんな衝撃的で、ワクワクした講演でした。

小山先生は介護保険を、「少子高齢化社会のなかで、同居家族に24時間365日連続する支援は困難であるから、社会がこれに代わったもの」としていました。逆に、24時間365日連続するサービスが提供されなければ、介護保険の意味がないというのです。

私が日頃の業務において、重度の介護が必要な方の在宅生活を考えた時に、介護サービスでは足りない部分を、家族に補ってもらおうと考えます。そして、家族が補えないときは、施設入所を目指していくのです。

しかし先生は、そもそも介護保険とは高齢者本人の保険であるから、家族が大変なので自宅へ戻れないと考えるのではなく、地域で暮らすためのサービスが足りないから自宅へ戻れないと考えるべきだとおっしゃいました。そして、その地域サービスが不足していることを、問題と捉えているのです。

小山先生が総合施設長を務める「こぶし園」では、介護保険制度が始まる前から、24時間の訪問介護と訪問看護、三食の配食サービスを、365日間行っていたそうです。そして現在、食事と介護が連続的にあることを地域包括ケアの基本と位置づけ、これを前提に、痛みや不安を解消するための「医療」を加え、その上で、暮らしてきた生活圏内に高齢者自身の部屋が必要として「住まい」を加え、『地域で暮らすということ』を実現させているそうです。

日本はこれから、高齢化率40%の社会に突入します。核家族化が進み、家庭内介護力が低下する中で、高齢者自身が望む暮らしを続けるためにはどうすればいいか、私たち一人ひとりが自分自身に置き換えて一人称で考えるべきだと、先生は訴えています。

国がすすめる在宅医療連携拠点事業では、病気を

持ちつつも、可能な限り住み慣れた場所で自分らしく過ごす「生活の質」を重視する医療が求められているとし、医療と介護が連携した地域における包括的かつ継続的在宅医療の提供を目指すとしています。在宅医療を充実させるに従い、自宅で死を迎える高齢者が増えると予想されますが、一人死に対するスウェーデンと日本の理解の違いを例に挙げ、「死に方の合意」についても考えるべきだとしていました。

介護保険制度が導入され、家族介護から社会介護へと変化したはずなのに、実際私の関わる地域では、連続した支援体制が整っておらず、家族の負担に頼らざるを得ない状況です。先生はお話の中で、地域社会をひとつの施設・病院として捉える方法を教えてくださいました。道路が廊下、自宅が居室になるそうです。自宅は、高齢者住宅でもアパートでも同じことで、どこにいても、24時間365日、生活に必要なサービスを受けられるのです。

安心を保証できるかかりつけの医師、医師をフォローする24時間365日の訪問看護、家族に頼らなくても支えることのできる一人暮らしの住まい、24時間365日の介護と3食365日の配食。地域サービスが整っていれば、家族が大変だから…、一人暮らしだから…なんてことを考えずに、高齢者が望む場所で、望む暮らしを実現できるのだと感じました。

今回の講演をお聞きして、サービス+家族介護と考えてきた自分自身の物差しが、新しいものになりました。

まだまだ地域サービスが足りない環境にはいますが、それを常に問題と捉え、自分にできることを模索していきたいと思います。

小山剛先生は、平成 27 年 3 月 13 日に永眠されました。ご冥福をお祈りいたします。

老年病研究所附属病院 真塩敦士 * * * * *

今回村井千賀先生より「地域リハビリテーション活動支援事業における専門職の役割」という演題で講演いただきました。

これからの将来、高齢者数の増加に伴い高齢者の単身世帯や高齢者のみの世帯、また認知症高齢者数が増加することが予想されています。それに伴い、地域における高齢者をどのように支援していくべきか検討していくことはとても大切なことだと話がありました。私は群馬県 OT 士会、老年・認知症支援検討グループに所属しています。研修会等の情報提供や情報交換を目的とした人材登録を行っており、多くの群馬県 OT 士会の方々が高齢者支援に対して興味・関心を持っていることを知ることができました。それと同時に「具体的にどのように支援すればよいかわからない」

といった声も多く挙がっていました。

村井先生の講演を聞いて、作業療法士は地域全体を高齢者が住みやすいように「デザイン」し、多職種や地域の人々とともに「マネジメント」していくことができるのではないかと感じました。高齢者が住みやすい街を「デザイン」するためには、地域の特徴を知り、その地域に必要な作業を掘り起こしていく必要があると思います。そして掘り起こした作業を基盤として地域の人々を巻き込み「マネジメント」していきます。そのためには地域の人の力が必要不可欠です。

地域で暮らしている高齢者に対する調査からボランティアに対して、「機会があったらしてみたい」「自分の持っている技能を使っていきたい」といった回答があがったそうです。ヒトの作業を支援するということはとても複

第4回介護予防サポーター交流大会

群馬県地域リハビリテーション支援センター事務局長 浅川康吉

平成27年2月22日にイオンモール高崎のイオンホールにて第4回介護予防サポーター交流大会を開催しました。大会の目的は、これまでと同様で、サポーター間の交流と一般県民へのサポーター活動の紹介です。

当日は12団体からブースを出展いただきました。それぞれのブースには模造紙をつかった手作り風の展示もあれば、美しいカラープリントでアカデミックな雰囲気の展示もあるという感じで、それぞれに工夫を凝らした展示がみられました。来場者は200名を越える大盛況で、会場内のあちこちに交流の輪ができていました。

介護予防サポーターの活動はその地域ならではのアイデアを取り入れて多様な活動が行われているようです。地域間交流の機会をつくる重要性はますます高くなると思いますので、県地域リハビリ支援センターとしても力を入れていきたいと思っております。

出展団体(アイウエオ順)

桐生市地区介護予防サポーター連絡会／渋川市介護予防サポーター／昭和村介護予防サポーター／館林市 クローバー荘地域包括支援センター・新橋地域包括支援センター・東毛光生園地域包括支援センター／玉村町／南牧村お達者クラブ／沼田市／藤岡市介護予防サポーター／前橋市介護予防サポーター／みどりふれあいサポーター連絡会(介護予防サポーターの自主グループ)／明和町／吉岡町四つ葉介護予防サポーター

第1回上級介護予防サポーター学び直し研修会

群馬県地域リハビリテーション支援センター事務局長 浅川康吉

第4回介護予防サポーター交流大会会場の隣接スペースを使って第1回上級サポーター学び直し研修会を開催しました。これまで学び直しニーズの調査、学び直し研修会の試行版の実施と進めてきましたが、このたびようやく第1回を開催することができました。

13:30～16:00と時間的にはやや短めの研修会でしたが、上級サポーターが対象ということで初級・中級教材に比べて高度な内容となる3つの講義を行いました。

第1講 加齢にともなう心身の変化(群馬大学大学院保健学研究科 亀ヶ谷先生)

第2講 レクリエーションの進め方(ゆうハイムくやばら 高野先生)

第3講 筋力トレーニングの理論と実際(群馬大学大学院保健学研究科 浅川先生)

今回は会場規模の関係で定員を先着50名とさせていただきますが、おかげさまでほぼ満席となりました。受講生の方々の満足度も高く、「規模を大きく」とか、「グループワークをとり入れてほしい」といったご意見もいただきました。県地域リハビリテーション支援センターとしては、こうした声を取り入れ、よりよい「学び直し研修会」を企画していきたいと思っております。



雑ですが、その多様なニーズに合わせて、地域の人々を適材適所に配置していくことで地域ぐるみで高齢者支援を行うことができます。高齢者数の増加に伴い地域でのつながりが希薄になってしまっている現状がありますが、上記のような地域全体を巻き込んだ支援を行っていくことで、つながりを持った暮らしを提供できると考えました。

これから先迎えることになる超高齢化社会において、自分たち作業療法士の作業療法士らしい独自の視点を活かしていくことで地域につながりを持たせていくことができるのだと思いました。それと同時に多職種で力を合わせていく大切さも感じました。今後も作業療法士として、また地域の一員として自分たちが暮らしている地域につながりをもたらし、幸せな街づくりに貢献していきたいと思っております。

県支援センター事務局便り (H26.12～H27.3)

- 12.10 ニュースレター23号発送
- 1.24 第13回群馬地域リハ研究会
- 1.27 県介護高齢課より事業予算受入
- 2.22 第4回介護予防サポーター交流大会
/上級介護予防サポーター向け学びなおし研修
- 3.5 華麗に加齢のサイエンス2015
- 3.19 第16回群馬県地域リハビリテーション
協議会・広域支援センター連絡協議会
- 3.31 ニュースレター24号発行

華麗に加齢のサイエンス 2015 開催

群馬県地域リハビリテーション支援センター事務局 浅川康吉

平成 27 年 3 月 5 日に前橋市の群馬会館で「華麗に加齢のサイエンス 2015」が開催されました。このイベントは群馬大学大学院保健学研究科と群馬県と群馬県地域リハビリテーション支援センターとの共催イベントで、群馬大学の平成 26 年度地域貢献事業としての支援を受けて行われました。

昨年の「華麗に加齢のサイエンス 2015」は大雪の影響などがあり出足が鈍かったのですが、今年は午後のみ開催とやや規模を縮小したにもかかわらず 260 名を越える多数の方にご来場いただきました。13:00 に開会后、群馬大学大学院の若手教員によるフレッシュ講演として、松井弘樹助教による「年はとっても血管年齢は若々しく！」と亀ヶ谷忠彦助教による「運動で脳をいきいき活性化！今日から始める認知機能トレーニング」が行われました。両講演とも楽しく学ぶことができたこと好評を博しました。

フレッシュ講演後は休憩をはさみ「活動報告～住民主体のまちづくり～」として 3 つの報告が行われました。住民が主体となって行っている活動を当事者(住民)自身に発表していただくという今回はじめての試みでした。ひとつめは高崎市介護予防サポーター城東小学校区の『地域が家族』第 1 回「よりみちふれあいコンサート」、ふたつめは玉村町から「ふれあいの居場所づくり よってぎい・板井」についての発表があり、さいごは前橋市富士見

地区介護予防サポーターの「- 笑み- が和となり活動の力に」でした。活動報告と平行して群馬大学の先生方や大学院生、大学院修了生により会場内には各種の体験コーナーが設けられました。脈波伝搬速度を用いた血管年齢の測定や、体組成計を使った肥満度、筋肉量、脂肪量、水分量の測定、バランス機能の測定、唾液をつかったストレス測定などが行われた。また、脳活性化トレーニングの体験や排尿の困りごと相談、昔の遊びを通して楽しく元気になるコーナーも設けられ、来場した方々は、講演や報告を聞いたり、ブースを巡ったりとこのイベントを楽しまれている様子でした。

「華麗に加齢のサイエンス」は今回で 4 回目となります。県支援センターは 2 回目(昨年度)からかわりはじめました。県支援センターとしてはこうしたイベントと通じ、大学との関係をいっそう深めていきたいと思っております。

群馬リハネット事務局便り

(H26.12~H27.3)

平成27年3月現在会員等の状況

* 加入団体 33 団体

* 賛助会員 団体会員 2 団体

(株)孫の手・ぐんま(旧ハッピーラブハッピー)と、榛名荘病院より賛助会費をいただいております。

* 個人会員 1名

12.7 ぐんま認知症アカデミー

第 9 回秋の研究発表会(後援)

12.10 ニュースレター16号発送

1.24 平成 26 年度第 1 回情報交換会

2.22 第 4 回介護予防サポーター交流大会(後援)

3.5 華麗に加齢のサイエンス 2015(後援)

ぐんま認知症アカデミー

第 10 回春の研修会

日時:平成 27 年 5 月 31 日(日)13:30~18:00

場所:群馬会館 ホール 参加費:500 円

●認知症の人のニーズに即したレクリエーション活動支援の在り方と実践 講師:ルナ・イ・ソル 代表取締役/福祉レクワーカー 高橋紀子先生

●優しさを伝えるケア技術:ユマニチュードの理念と技術 講師:国立病院機構東京医療センター 総合内科医長 本田美和子先生

●その他:地域情報

実演! 認知症ケア

※詳細とお申込は、ホームページをご覧ください。

<http://happytown.orahoo.com/ninchi/>

編集デスク

山口晴保

浅川康吉

角田祐子

発行

群馬リハネット

群馬県地域リハビリテーション支援センター

連絡先

群馬リハネット事務局

群馬県地域リハビリテーション支援センター事務局

群馬大学大学院保健学研究科内

Tel/Fax : 027-220-8966

E-mail: tsunoday@gunma-u.ac.jp